

日蓮大聖人御書全集

そやにゅうどうどのもとごしょ

曾谷入道殿許御書

新版

1390

ς

1410

そやにゅうどうどのもとゞしょ

# 曾谷入道殿許御書

ぶんえい

ねん

がつ

にち

そやきょうしん

おおたじょうみよう

文永 12 年 (75)

3 月 10 日 \*

曾谷教信

・大田乘明

夫れ以んみれば、重病を療治するには良薬を構索し、

ぎやくぼう

くじよ

ようほう

るうやく

こづさく

逆謗を救助するには要法にはしかず。いわゆる、時を論ず

しようぞうまつ

きょう ろん

しようだい

へんえん

ごんじつ

けんみつ

くに

れば正像末、教を論ずれば小大・偏円・權実・顯密、国を

ろん

ちゅう

へん

りょうごく

き

ろん

いぎやく

みぎやく

いぼう

論ずれば中・辺の両国、機を論ずれば已逆と未逆と、已謗

みぼう

し

ろん

ぼんし

しようし

にじょう

ぼさつ

たほう

と未謗と、師を論ずれば凡師と聖師と、二乘と菩薩と、他方

しじ

しゃつけ

ほんげ

ゆえ

しえ

ぼさつとう

めつご

と此土と、迹化と本化となり。故に四依の菩薩等、滅後に

しゅつげん

ほとけ

ふぞく

したが

出現し、仏の付囑に随つて、みだりに経法を演説した

きょうぼう

えんぜつ

まわす。

詮<sup>せん</sup>するところ、無智の者の、いまだ大法を謗<sup>ぼう</sup>ぜざるには、  
たちまちに大法を与<sup>あた</sup>えず、悪人<sup>あくにん</sup>たる上、すでに実大<sup>じつだい</sup>を謗<sup>ぼう</sup>  
る者には、強いてこれを説くべし。

法華經第二の卷に、仏、舍利弗に對して云わく「無智の  
人の中にして、この經を説くことなかれ」。また第四の卷に  
薬王菩薩等の八万の大士に告げたまわく「この經はこれ  
諸仏の秘要の藏なり。分布してみだりに人に授与すべから  
ず」等云々。文の心は、無智の者の、しかもいまだ正法を

ぼう

そ  
う

き  
ょう

と

謗ぜざるには、左右なくこの経を説くことなかれと。

ほけきようだいしち  
かん

ふきようほん  
い

ないしとお  
ししゅ

み

法華經第七の卷の不輕品に云わく「乃至遠く四衆を見ても、

ことさら  
かん

とううんぬん  
い

ししゅ  
なか

しんに

また故に往つて」等云々。また云わく「四衆の中に、瞋恚

しよう  
い

こころふじょう  
ものあ

い  
あつく  
めり

とううんぬん  
い

を生じて心不淨なる者有つて、惡口・罵詈して言わく『こ

むち  
びく

きた

とううんぬん  
い

の無智の比丘は、いづこより来るか』と』等云々。また云わ

じょうもく  
がしゃく

ちょうちやく  
とううんぬん

とううんぬん  
すいか

く「あるいは杖木・瓦石をもつて、これを打擲す』等云々。

だいに  
だいし  
かん

きょうもん  
だいしち  
かん

きょうもん  
てんち  
かん

第二・第四の卷の経文と第七の卷の経文と天地・水火な

り。

と

いつきようくせつ

ぎ  
つ

き  
ょう

問うて曰わく、一經二説、いづれの義に就いて、この経

を弘通すべき。  
ぐつう

答えて云わく、 私に会通すべからず。 靈山の聴衆た  
こた い わたくし えつう

る天台大師ならびに妙楽大師等、 処々に多くの釈有り。  
てんだいだいし みょうらくだいしどう しょしょ おお しゃくあ  
りょうぜん ちょうしゅ

まず一・両の文を出ださん。 文句の十に云わく「問うて曰  
いち りょう もん い もんぐ じゅう い

わく、 釈迦は出世して踟蹰して説かず。 今はこれ何の意ぞ。  
しゃか しゅつせ ちちゅう と いま なん ここる

造次にして説くは何ぞや。 答えて曰わく、 本すでに善有れ  
ぞうじ しゃか しょう こた い もと ぜんあ

ば、 釈迦は小をもつてこれを將護し、 本いまだ善有らざれ  
ふきよう だい しきう どこうどく もと ぜんあ

ば、 不輕は大をもつてこれを強毒す」 等云々。 釈の心は、  
じやくめつ ろくや だいほう びやくろとう ぜんしみ しょうだい ごんじつ しょきよう

寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・權実の諸経、  
じやくめつ ろくや だいほう びやくろとう ぜんしみ しょうだい ごんじつ しょきよう

しきようはつきよう しょひ きえん かれ かこ たず み くおん  
四教八教の所被の機縁、彼らの過去を尋ね見れば、久遠。  
だいとう とき だいとう とき  
大通の時ににおいて純円の種を下ろせしかども、諸の衆、  
いちじょうきょう ぼう じゅんえん たね お もろもう しゅ  
一乗経を謗ぜしかば、三・五の塵点を経歴す。しかり  
さん ご じんてん きょうりやく  
といえども、下ろせしころの下種、純熟の故に、時至つ  
みづか けいじゆ あらわ げしゆ じゅんじゆく ゆえ ときいた  
て自ら繫珠を顕す。ただし、四十余年の間、過去にすで  
けちえん もの しじゅうよねん あいだ かこ  
に結縁の者もなお謗の義有るべきの故に、しばらく權小の  
しょきょう えんぜつ こんき ね ジンショウ  
諸経を演説して根機を練らしむ。  
と い けいこん とき べつえん だいぼさつ ないしかんぎょうとう  
問うて曰わく、華嚴の時の別円の大菩薩、乃至觀經等の  
諸の凡夫の得道は、いかん。

もうもろ

ほんぶ

とくどう

こた  
い  
かれ  
しゆ  
とき  
ろん  
答えて曰わく、彼らの衆は、時をもつてこれを論すれば、

きょう  
とくどう  
に  
かんが  
さん  
ご  
げしゅ  
やから  
三・五の下種の輩なり。

と  
問うて曰わく、その証拠、いかん。

こた  
い  
ほけきょうだいご  
かん  
ゆじゅっぽん  
い  
答えて曰わく、法華経第五の巻の涌出品に云わく「この

もうもろ  
しゅじょう  
せ  
ぜ  
このかた  
つね  
わ  
け  
う  
ないし  
諸の衆生は、世々より已來、常に我が化を受く乃至この

もうもろ  
みなしんじゅ  
はじ  
わ  
み  
み  
わ  
と

諸の衆生は、始め我が身を見、我が説くところを聞き、

すなわ  
みなしんじゅ  
によらい  
え  
い  
とううんぬん  
てんだい  
しゃく

即ち皆信受して、如來の慧に入りき」等云々。天台、釈し

い  
くおん  
とううんぬん  
みょうらくだいし  
だつ

て云わく「衆生は久遠に」等云々。妙樂大師云わく「脱は

現げんに在ありといえども、つぶさに本種ほんしゅを騰いぐ。また云あわく「故ゆえに知しんぬ、今日の逗会うんぬんは昔ごんにちの成就すえの機きに赴むかしくことを」等とう云々。經きょうと釈しゃくと顯然けんねんの上うえは私の料簡りょうげんを待たまたず。例れいせば、王女おうじょと下女げじょと、天子てんしの種子たねを下ろさずんば、國主おとならざるがごとし。

問とうて曰いわく、大日經等だいにちきょうとうの得道とくどうの者は、いかん。

答こたえて曰いわく、種々しゅじゅの異義いぎ有ありといえども、繁せんきが故しげに

これを載のせず。ただし、詮かれがれづるところ、彼々きょううぎようの經ゆえ々しゆに種ゆえ・

熟じゅく・脱だつを説かざれば、還かえつて灰断けだんに同じ。化おなに始め無はじきの

きよう

しんごんしどう

そくしんじょうぶつ

だん

たと

經なり。しかるに、真言師等、即身成仏を談ずるは、譬え

ぐうにん

ていおう

ごう

みづか

ちようめつ

と

ば、窮人のみだりに帝王と号して自ら誅滅を取るがごと

おうもう

ちようこう

やから

ほか

もと

いま

しんごんけ

し。王莽・趙高の輩、外に求むべからず、今の真言家な

ちな

ろん

り。これらは因みに論ぜしなり。

ほとけ

めつご

さんじあ

しようぞうにせんよねん

仏の滅後ににおいて三時有り。正像二千余年には、なお下

しゅ ものあ

れい

ざいせしじゅうよねん

種の者有り。例せば、在世四十余年のごとし。機根を知ら

そ う

じつきょう

あた

いま

すで

まつぼう

い

ずんば、左右なく実経を与うべからず。今は既に末法に入

ざいせ

けちえん

もの

ぜんぜん

すいび

ごんじつ

にきみな

う

つて、在世の結縁の者は漸々に衰微して、権実の二機皆こ

つ

か

ふきようばさつ

まっせ

しゅつけん

どつく

う

とごとく尽きぬ。彼の不軽菩薩、末世に出現して毒鼓を擊

とき

こんじ

がくしゃ

じき

めいわく

たしむるの時なり。しかるに、今時の学者、時機に迷惑して、あるいは小乗を弘通し、あるいは權大乗を授与し、

あるいはいちじょう えんぜつ

げしう

あるいはごんだいじょう じゅよ

げしう

あるいは一乘を演説すれども、題目の五字をもつて下種となすべきの由來を知らざるか。

なすべきの由來を知らざるか。

しんごんしゅう がくしゃ めいわく

いだ

さんぶきょう えびよう

えびよう

たん

ことに真言宗の学者、迷惑を懷いて三部經に依憑し、單

えにはに ぎ の

きんいちそうたい と

そくしんとんご

に会二破二の義を宣ぶ。なお三一相対を説かず。即身頓悟の

どう あと けづ

そうちもくじょうぶつ な

き

道、跡を削り、草木成仏は名をも聞かざるのみ。しかるに、

ぜんむい こんこうち ふくうとう

そうちりょ

がつし

かんど

らいりん

善無畏・金剛智・不空等の僧侶、月氏より漢土に來臨せし

とき

ほんごく

の時、本国においていまだ存せざる天台の大法盛んにこの

そん

てんだい

だいほうさか

くに るふ

じあい

しょじ

きょうひる

がた

國に流布せしむるのあいだ、自愛の所持の經弘め難きによ

いちぎょうあじやり かた

え

てんだい

ちえ

ぬす

と

り、一行阿闍梨を語らい得て、天台の智慧を盜み取り、

だいにちきょうとう おさ い

てんじく

あ

よし

いつわ

大日經等に攝め入れて、天竺より有るの由これを偽る。

しんたんいつこく

おうしんとう

にほんこく

こうぼう

じかく

しかるに、震旦一国の王臣等ならびに日本國の弘法・慈覺の

りょうだいし

わきま

しん くわ

い げ

しょがく

い

両大師、これを弁えずして信を加う。已下の諸学は言うに

た かんど にほん なか でんぎょうだいしこん

ふんみよう

おも

足らず。ただ漢土・日本の中に伝教大師一人これを惟いた

まえり。しかれども、いまだ分明ならず。詮ずるところ、

ぜんむいさんぞう えんまおう せ

こうむ

かざい く

ふくう

善無畏三藏、閻魔王の責めを蒙つてこの過罪を悔い、不空

さんぞう てんじく かえ わた

しんごん す

かんど

らいりん

てんだい

三藏、天竺に還り渡つて真言を捨てて漢土に來臨し、天台の

戒壇を建立し、両界の中央の本尊に法華経を置きしは、  
これなり。

問うて曰わく、今時の真言宗の学者等、何ぞこの義を存  
ぜざるや。

答えて曰わく、「眉は近けれども見えず、自らの禍いを知  
らず」とはこの謂いか。嘉祥大師は三論宗を捨てて天台の  
弟子となる。今の末学等、これを知らず。法藏・澄觀は  
華嚴宗を置いて智者に帰す。彼の宗の学者、これを存ぜず。  
玄奘三蔵・慈恩大師は五性の邪義を廃して一乗の法に移

る。法相の学者、堅くこれを詮う。

問うて曰わく、その証、いかん。

答えて曰わく、あるいは心を移して身を移さず、あるいは

は身を移して心を移さず、あるいは身心共に移し、あるいは

は身心共に移さず。その証文は別紙にこれに出だすべし。

この消息の詮にあらざれば、これに出ださず。

仏の滅後に三時有り。いわゆる正法一千年。前の五百年には、迦葉・阿難・商那和修・末田地・脇比丘等、一向に小乗

の薬をもつて衆生の軽病を対治す。四阿含經と十誦・

はちじゅうじゅとう しょりつ そぞくげだつきようとう さんぞう ぐつう のち  
八十誦等の諸律と相続解脱經等の三藏を弘通して、後には  
律宗・俱舍宗・成実宗と号する、これなり。後の五百年  
には、馬鳴菩薩・龍樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩  
等の諸の大論師、初めには諸の小聖の弘めしところ  
の小乘経これに通達し、後には一々に彼の義を破失した  
わつて、諸の大乗経を弘通す。これまた中薬をもつて  
衆生の中病を対治す。いわゆる華嚴經・般若經・  
大日經・深密經等、三輪宗・法相宗・真言陀羅尼・禪法  
等なり。

大乗經を弘めざるや。

答えて曰わく、一には自身堪えざるが故に、二には所被の  
機無きが故に、三には仏より譲り与えられざるが故に、四  
には時來らざるが故なり。

問うて曰わく、竜樹・天親等、何ぞ一乘經を弘めざる

や。

答えて曰わく、四つの義有り。先のごとし。

問うて曰わく、諸の真言師云わく「仏の滅後八百年に

あい  
あ

りゅうみょうぼさつ

がっし

しゅつげん

しゃくそん

けんきょう

相當たつて、竜猛菩薩、月氏に出現して、釈尊の顯教

けごん ほつけとう めみょうぼさつとう そうでん

だいにち

みつきよう

たる華嚴・法華等を馬鳴菩薩等に相伝し、大日の密教をば、

みづか なんてん てつとう かいたく まのあた

だいにちによらい

こんごうさつた

自ら南天の鉄塔を開拓し、面り大日如来と金剛薩埵とに

たい

くけつ

りゅうみょうぼさつ

ににん

でしあ

だいば

対してこれを口決す。竜猛菩薩に二人の弟子有り。提婆

ぼさつ

しゃか

けんきょう つた

りゅうみょうぼさつ

だいにち

みつきよう

菩薩には釈迦の顯教を伝え、竜智菩薩には大日の密教を

さず

りゅううちぼさつ つた

あらおん いんきよ

ひと つた

だいにち

みつきよう

授く。竜智菩薩は阿羅苑に隠居して人に伝えず。その間に

だいばぼさつ つた

かんど わた

のち

提婆菩薩の伝うるところの顯教、まず漢土に渡る。その後

すうねん きょうりやく つた

ひみつ

きょう

ぎ

数年を経歴して、竜智菩薩の伝うるところの秘密の教を、

ぜんむい

こんごうち

ふくう

かんど わた

とううんぬん

ひみつ

きょう

ぎ

善無畏・金剛智・不空、漢土に渡す」等云々。この義、い

かん。

こた

い

いつさい

しんごんし

てんだい

答えて曰わく、一切の真言師かくのごとし。また天台・

けいんとう しょけ いちどう

がっしこく なか

だいにち さんぶきょうな

しやか

りゆうみょういぜん

華嚴等の諸家も一同にこれを信ず。そもそも、龍猛已前に

がっしこく

なか

だいにち さんぶきょうな

りゆうみょういぜん

けん

い

は月氏國の中には大日の三部經無しと云うか。釈迦よりの

ほか

だいにちによらいよ

しゅつけん

さんぶ きよう

と い

きょうろん

い

外に大日如來世に出現して三部の經を説くと云うか。顯

だいば

つた

みつ

りゅうち

さず

じょうもん

きょうろん

い

を提婆に伝え、密を龍智に授くる証文、いづれの經論に出

だいもうご

だいば

こおうざい

す

くぎやり

い

でたるぞ。この大妄語は、提婆の虛誑罪にも過ぎ、瞿伽利の

きょうげん

こ

かんど

にほん

おうい つ

りょうちよう

そなりよ

狂言にも超ゆ。漢土・日本の王位の尽き、両朝の僧侶の

ほうぼう

もっぱ

あ

謗法となるの由来、専らこれに在らずや。しからば則ち、

すなわ

か しんたんすで ほくばん やぶ にちいき さいじゅう  
彼の震旦既に北蕃のために破られ、この日域もまた西戎の

ために侵されんと欲す。これらはしばらくこれを置く。

ぞうほう い いつせんねん がっし ぶつぼうかんど とらい  
像法に入つて一千年、月氏の仏法漢土に渡来するのあい

だ、前の四百年には、南北の諸師は異義蘭菊にして、東西の

ぶつぼう さだ なんぽく しょし い ぎ らんぎく とうざい  
仏法いまだ定まらず。四百年の後、五百年の前、その中間

いつぴやくねん あいだ なんがく てんだいとう かんど こひやくねん さき  
一百年の間に、南岳・天台等、漢土に出現して、ほぼ法華

じつぎ ぐせん えんどん かいじょう えんえ えんじょう  
の実義を弘宣したもう。しかれども、円慧・円定において

こくし えんりゅう  
は国師たりといえども、円頓の戒場いまだこれを建立せ

ゆえ くに あ かいし あお ろっぴやくねん いご ほつそうしゅう  
ず。故に国を挙げて戒師と仰がず。六百年の已後、法相宗

西天より来れり。太宗皇帝これを用いるが故に、天台法華宗  
に帰依するの人漸く薄し。ここに就いて隙を得て、則天  
皇后の御宇に、先に破られし華嚴また起こつて、天台宗に  
勝れたるの由、これを称す。太宗より第八代玄宗皇帝の  
御宇に、真言始めて月氏より来れり。いわゆる、開元四年に  
は善無畏三藏の大日經・蘇悉地經、開元八年には金剛智・  
不空の両三藏の金剛頂經、かくのごとく三經を天竺よ  
り漢土に持ち來り、天台の釈を見聞して智發して、釈を作  
つて大日經と法華經とを一經となし、その上に印・真言を

くわ  
みつきょうすぐ  
よし ごう  
けつく ごんきょう  
じつきょう  
加えて密教勝るるの由を号し、結句、權經をもつて實經  
を下す。漢土の学者このことを知らず。  
ぞうほう  
まつはつぴやくねん  
あいあ  
ぞうほう  
まつはつぴやくねん  
あいあ  
像法の末八百年に相當たつて、伝教大師、和國に託生  
げこんしゅうとう  
ろくしゅう  
じやぎ  
きゆうめい  
でんぎょうだいし  
わこく  
たくしよう  
して、華嚴宗等の六宗の邪義を糾明するのみにあらず、  
なんがく  
てんだい  
ひろ  
えんどん  
しかのみならず、南岳・天台もいまだ弘めたまわざる円頓  
かいだん  
えいざん  
こんりゅう  
にほんいつしゅう  
がくしゃ  
ひとり  
のこ  
だいし  
の門弟となる。ただし、天台と真言との勝劣と誑惑におい  
し  
ふんみよう  
せん  
しょうれつ  
おうわく  
まつぽう  
おく  
ては、知つてしまも分明ならず。詮ずるところ、末法に贈  
ぼうろん  
ゆえ  
りたもうか。これらは、傍論たるの故に、しばらくこれを置  
お

く。吾が師・伝教大師、三国にいまだ弘まらざるの円頓の大戒壇をば叡山に建立したもう。これひとえに、上藥を持ち用いて衆生の重病を治せんとせる、これなり。

今、末法に入つて一一百二十余年、五濁強盛にして三災しきりに起こり、衆・見の一濁國中に充満し、逆・謗の一輩四海に散在す。専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃怙し、謗法の者を尊重して国師となす。孔丘の孝經これを提げて父母の頭を打ち、釈尊の法華経を口に誦しながら教主に違背す。不孝国はこの国なり。勝母の間、他境に求めず。

ゆえ

せいてん まなこ いか

くに

にら

こうち

いきどお

故に、青天は眼を瞋らしてこの国を睨み、黄地は憤りを

ふく

だいち ふる

ふる

い

しょうかがんねん

だいじどう ぶんえいがんねん

あいだ

含んで大地を震わす。去ぬる正嘉元年の大地動、文永元年の

だいすいせい

い

ほとけ

めつごにせんにひやくにじゅうよねん

あいだ

大彗星、これらの災天は、仏の滅後二千二百二十餘年の間、

がっし

かんど

にほん うち

うち

しゅつけん

だいなん

月氏・漢土・日本の内にいまだ出現せざるところの大難な

か

ほつしやみつたらおう

ごてん じとう

しょうしつ

かんど

かいしよう

かんど

かいしよう

り。彼の弗舍蜜多羅王の五天の寺塔を焼失し、漢土の会昌

てんし くこく

そうに げんぞく

じゅうか

いつてん

はびこ

天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すること百千倍

だいほうぼう

やからこくちゅう

じゅうまん

いつてん

はびこ

ひやくせんばい

お

なり。大謗法の輩國中に充満し一天に弥るによつて起

ようさい

こるところの天災なり。

だいはつねはんぎよう い

まつぽう

い

ふこう

ほうぼう

もの

だいち

大般涅槃経に云わく「末法に入つて不孝・謗法の者、大地

みじん

微塵のごとし」取意。

法滅尽經に「法滅尽の時は、

狗犬の

くけん

僧尼、恒河沙のごとし」等云々〈取意〉。今、

親りこの國を

くに

見聞するに、人ごとにこの二つの惡有り。これらの大惡の

だいあく

やから

輩は、いかなる秘術をもつてこれを扶救せん。

だいかくせそん

ぶつげん

まっぽう  
かんち

ぎやく

ぼう

に

大覺世尊、仏眼をもつて末法を鑑知し、この逆・謗の二

ざい  
たいじ

いちだいひほう  
とど

お

罪を対治せしめんがために、一大秘法を留め置きたもう。

ほけきようほんもんくじょう  
しゃくそん  
ほうじょうせかい

たほうぶつ  
たか

に

にぶつ  
たか

いわゆる、法華經本門久成の釈尊、宝淨世界の多寶仏、高

ごひやくゆじゅん  
ひろ

にひやくごじゅうゆじゅん

だいほうとう  
なか

に

さ五百由旬・廣さ二百五十由旬の大寶塔の中において二仏

ざ  
なら

にちがつ

じっぽうふんじん

しょぶつ

座を並べしこと、あたかも日月のごとく、十方分身の諸仏は、

たか ごひやくゆじゅん ほうじゅ もと ごゆじゅん しし ざ なら し  
高さ五百由旬の宝樹の下に五由旬の師子の座を並べ敷き、  
しゅしよう しひやくまんおくなゆた だいち れつざ さんぶつ  
衆星のゴとく四百万億那由他の大地に列坐したもう。三仏  
にえ じゅうまん すぐ ぎしき けごんじやくじょう けぞうせかい  
の二会に充满したもうの儀式は、華嚴寂場の華藏世界に  
も勝れ、真言両界の千二百余尊にも超えたり。一切世間眼  
だいえ せんにひやくよそん こ いっさいせけんげん  
は、この大会において、六難九易を挙げて法華経を流通せ  
ろくなんくい あ ほけきよう るつう  
もろもろ だいばさつ かんぎょう  
んと諸の大菩薩を諫曉せしむ。金色世界の文殊師利、  
としたぐう みろくぼさつ ほうじょうせかい ちしゃくぼさつ もんじゅしり  
兜史多宮の弥勒菩薩、宝淨世界の智積菩薩、補陀落山の  
かんぜおんぼさつとう ずだだいいち だいかしよう ちえだいいち しやりほつとう  
觀世音菩薩等、頭陀第一の大迦葉、智慧第一の舍利弗等、  
さんぜんせかい とうりょう むりよう いただき こじゅう  
三千世界を統領する無量の梵天、須弥の頂に居住する

無辺の帝釈、一四天下を照耀せる阿僧祇の日月、十方の  
仏法を護持する恒沙の四天王、大地微塵の諸の竜王等、  
我にも我にもこの經を付囑せられよと競い望みしかども、  
世尊すべてこれを許したまわづ。

その時に、下方の大地より未見今見の四大菩薩を召し出  
だしたもう。いわゆる上行菩薩・無辺行菩薩・淨行  
菩薩・安立行菩薩なり。この大菩薩、各々六万恒河沙の  
眷属を具足す。形貌・威儀、言をもつて宣べ難く、心を  
もつて量るべからず。初成道の法慧・功德林・金剛幢・

こんごうぞうとう し ぼさつ おののおのじゅうごうがしゃ けんぞく ぐそく ぶつえ  
金剛藏等の四菩薩、各々十恒河沙の眷属を具足し仏会を  
しょうごん らいりん じっぽう しょだいぼさつ ないしだいにちきょう はちよう なか し  
莊嚴せしも、大集經の欲・色二界の中間、大宝坊におい  
だいぼさつ だいじつきょう よく しきにかい ちゅうげん だいほうぼう  
て来臨せし十方の諸大菩薩、乃至大日經の八葉の中の四  
だいぼさつ こんごうちょうきょう さんじゅうしちそん なか じゅうろくだいぼさつとう  
大菩薩も、金剛頂經の三十七尊の中の十六大菩薩等も、  
しだいぼさつ ひきょう たいしゃく えんこう かざん  
この四大菩薩に比較すれば、なお帝釈と猿猴と、華山と  
みょうこう  
妙高とのべどし。

みろくぼさつ しゅ うたが あ い いちにん  
弥勒菩薩、衆の疑いを挙げて云わく「いまし一人をも識  
とううんぬん てんだいだいしい じやくじょう このかた こんざ  
らづ」等云々。天台大師云わく「寂場より已降、今座よ  
いおう じっぽう だいじらいえ た かぎ

ども、我は補尙の智力をもつて、ことごとく見、ことごとく  
く知る。しかるに、この衆においては一人をも識らず」等  
云々。妙樂云わく「今見るに皆識らざる所以は乃至智人は  
起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。天台また云わく「雨  
の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の  
深きを知る」云々。

例せば、漢王の四将の張良・樊噲・陳平・周勃の四人  
を、商山の四皓、綺里季・角里先生・園公・夏黃公等の四賢  
に比するがごとし。天地雲泥なり。四皓が為体、頭には

しろゆき いただ ひたい しかい なみ たた まゆ はんげつ うつ  
白雪を頂き、額には四海の波を畳み、眉には半月を移し、  
こし たらし は けいてい そ う よ おさ  
腰には多羅枝を張り、惠帝の左右に侍して世を治められた  
ぎょう しゅん いにしえ うつ いつてんあんのん  
ること、堯・舜の古を移し、一天安穩なりしこと、神農  
むかし こと  
の昔にも異ならず。この四大菩薩もまたまたかくのごとし。  
ほつけ え しゅつげん  
法華の会に出現し、三仏を莊嚴し、謗人の慢幢を倒すこ  
さんぶつ しょうごん  
と、大風の小樹の枝を吹くがごとく、衆会の敬心を至す  
おおかぜ しょうじゅ えだ ふ  
こと、諸天の帝釈に従うがごとし。提婆が仏を打ちしも  
した い たなごころ あ だいば ほとけ う  
舌を出だして掌を合わせ、瞿伽利が無実を構えしも地に  
ふ とが く もんじゅとう だいしよう  
臥して失を悔ゆ。文殊等の大聖は身を慙じて言を出ださ  
み は ことば い

しゃりほつとう しょうしよう ち うしな こうべ た

す。舍利弗等の小聖は智を失つて頭を低る。

とき

だいかくせそん じゅりょうほん えんぜつ

のち

その時に、大覺世尊、寿量品を演説し、しかして後に

じゅうじんりき

じげん

しょぞく

十神力を示現して、四大菩薩に付囑したもう。その所囑の

ほう なにもの

ほけきよう なか

こう す

りやく と

しょぞく

法は何物ぞや。法華経の中にも、広を捨てて略を取り、略

ほう ゆう よう と

れい

みょうほうれんげきよう

ごじ

みょう

たい

こう

こう

こう

こう

を捨てて要を取る。いわゆる、妙法蓮華経の五字、名・体・

ほう

げんこう

りやく

しゅんいつ

と

きゅうほういん

うま

そう

こう

こう

こう

こう

宗・用・教の五重玄なり。例せば、九方堙が馬を相する

しどうりん

きよう

こう

こう

こう

こう

こう

の法には玄黄を略して駿逸を取り、支道林が経を講ずる

ほう

さいか

す

がんい

と

とう

しだいぼさつ

しゃくそんじょうどう

はじ

じやくめつじょうじょう

みぎり

みぎり

みぎり

この四大菩薩は、釈尊成道の始め寂滅道場の砌にも

きた

によらいにゆうめつ

お

ばつだいが

ほとり

いた

来らず、如來入滅の終わり抜提河の辺にも至らず。しか

のみならず、靈山八年の間に、進んでは迹門序正の儀式

すす  
しゃくもんじよしよう  
ぎしき

のみならず、靈山八年の間に、進んでは迹門序正の儀式

りょうぜんはちねん  
あいだ

すす  
ほつき  
ようごう  
しょしょうしゅ

つら  
しりぞ

に文殊・弥勒等の发起・影響の諸聖衆にも列ならず、退い

ほんもんるつう  
ざせき  
かんのん

みようおんとう

ほつせいぐきよう

だいじ

かぎ

ては本門流通の座席に觀音・妙音等の發誓弘経の大士にも

いちだいひほう  
たも

もと  
ところ  
いんきよ

かぎ

交わらず。ただこの一大秘法を持つて本の処に隱居するの

のち  
ほとけ  
めつご  
しようぞうにせんねん  
あいだ

いちど

後、仏の滅後正像一千年の間ににおいていまだ一度も

ほとけもつぱ

まつせ  
とき

かぎ

いまだ  
いちど

だいじ  
ふぞく  
ゆえ

せん

かぎ

出現せず。詮ずるところ、仏専ら末世の時に限つてこれらの大士に付嘱せし故なり。

ほけきよう  
ふんべつくどくほん  
い

あくせ  
まつぱう

とき

よ

法華経の分別功德品に云わく「悪世末法の時、能くこの

きょう

たも

経を持たば 云々。涅槃經に云わく「譬えば、七子あり、

ふ ぼ び ょう ど う

父母平等ならざるにあらざれども、しかも病者において

こ ころ す な わ

心則ちひとえに重きがごとし」云々。法華經の藥王品に云

き ょう

す な わ

え ん ぶ だい

ひと

やまい

ろ う やく

わく「この經は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり」

うんぬん

しちし

なか

かみ

ろくし

云々。

七子の

中

上

の

六子は

し ば ら く

こ れ を

置

く。

第

七

の

子

病子は、一闡提の人、五逆・謗法の者、末代悪世の日本國の

いっさいいしゅじょう

一切衆生なり。

しょうほういつせんねん

さき

ごひやくねん

いっさい

しょうもん

ねはん

お

正法一千年の前の五百年前には、一切の声聞、涅槃し了わ

のち

ごひやくねん

た ほ う

きた

ぼ さ つ

だいたいほんどう

かえ

んぬ。後の五百年前には、他方より来れる菩薩、大体本土に還

り向かい了わんぬ。像法に入つての一千年には、文殊・

ぞうほう　い　いつせんねん　もんじゅ

觀音・薬王・弥勒等、南岳・天台と誕生し、傳大士・行基・

なんがく　てんだい　たんじょう　ふだいし　ぎょうき

伝教等と示現して、衆生を利益す。

いま　まっぽう　い　しょだいじ　みな　もと　ところ　いんきよ

今、末法に入つて、これらの諸大士も皆、本の処に隠居

ほか　えんぶしゅご　てんじんち　ぎ　あつこく　しゅご

しぬ。その外、閻浮守護の天神地祇も、あるいは他方に去り、

あるいはこの土に住すれども悪國を守護せず、あるいは

ほうみ　な　しゅご　ちからな　れい　ほっしん　だいじ

法味を嘗めざれば守護の力無し。例せば、法身の大士にあ

だいくしの　がた　ゆえ

らざれば三悪道に入らざるがごとし。大苦忍び難きが故な

じゅせんがい　だいぼさつ　いち　しゃばせかい　じゅう

り。しかるに、地涌千界の大菩薩、一には娑婆世界に住す

たじんごう

に

しゃくそん

したが

くおん

このかた

ること多塵劫なり。二には釈尊に随つて久遠より已來  
しょほっしん でし さん に しゃばせかい しゅじょう さいしょげしゅ  
初發心の弟子なり。三には娑婆世界の衆生の最初下種の  
ぼさつ とう しゅくえん ほうべん しょだいぼさつ ちようか  
菩薩なり。かくのごとき等の宿縁の方便、諸大菩薩に超過  
せり。

と

い

しょうこ

問うて曰わく、その証拠、いかん。

ほつけだいご

ゆじゅっぽん

い

とき

たほう

こくど

もうもろ

法華第五の涌出品に云わく「その時、他方の國土の諸の  
きた ほつけ まかさつ はちごうがしや かず す ないし とき

来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたるは乃至その時、  
ほとけ もろもろ ぼさつまかさつしゅ つ や

仏は諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく『止みね。善男子  
きょう ごじ

もち とううんぬん

よ。汝等がこの經を護持せんことを須いじ』と等云々。

天台云わく「他方はこの土に結縁のこと浅し。宣授せんと欲すといえども、必ず巨益無からん」云々。妙樂云わく「なおひとえに他方の菩薩に付せず。あに独り身子のみならんや」云々。また天台云わく『八万大士に告げたまわく』とは乃至今下の文のごときは、下方を召してなお本眷属を待つ。驗らけし、余はいまだ堪えざること』云々。經釈の心は、迦葉・舍利弗等の一切の声聞、文殊・藥王・觀音・弥勒等の迹化・他方の諸大士は、末世の弘経に堪えずというなり。

きょう　い　わ　しゃばせかい　おの　ろくまんごうがしゃとう  
経に云わく『我が娑婆世界に自ずから六万恒河沙等の  
菩薩摩訶薩有り、一々の菩薩に、各六万恒河沙の眷属有り。  
この諸人等は、能く我滅して後において、護持・読誦し、広  
くこの経を説かん』と。仏これを説きたもう時、娑婆世界  
の三千大千の国土は、地皆震裂して、その中より無量千万億  
の菩薩摩訶薩有つて、同時に涌出せり乃至この菩薩衆の中  
に、四導師有り。一に上行と名づけ、二に無辺行と名づ  
け、三に淨行と名づけ、四に安立行と名づく。その衆の  
中にいて、最もこれ上首・唱導の師なり』等云々。天台  
なか　もつと　じょうしゅ　じょうどう　し　とううんぬん　てんたい

云わく「これ我が弟子、応に我が法を弘むべし」云々。妙樂  
い  
云わく「子、父の法を弘む」云々。道遯云わく「付囑とは、  
い  
この經をば、ただ下方涌出の菩薩のみに付す。何をもつて  
きょう  
の故にしかる。法これ久成の法なるに由るが故に、久成の人  
ゆえ  
に付す」等云々。

これらの大菩薩、末法の衆生を利益したもうこと、なお  
うお  
魚の水に練れ鳥の天に自在なるがごとし。濁惡の衆生、  
みず  
この大士に遇つて仏種を殖うること、例せば、水精の月に  
だいじ  
む  
向かつて水を生じ、孔雀の雷の声を聞いて懷妊するがご  
くじやく  
くじやく  
かいにん

とし。天台云わく「なお百川の応須に海に潮ぐべきがご」と

く、縁に牽かれて應生すること、またかくのごとし」云々。

えにちだいしようそん ぶつげん  
慧日大聖尊、仏眼をもつて兼ねてこれを鑑みたもう故

もろもろ だいしよう しゃき  
に、諸の大聖を捨棄し、この四聖を召し出だして要法を

つた まっぽう ぐつう さだ  
伝うるなり。末法の弘通を定むるなり。

しそう め い  
と い ようほう きょうもん  
問うて曰わく、要法の経文いかん。

こた くでん  
答えて曰わく、口伝をもつてこれを伝う。

つた  
しゃくそん のち しうぞうにせんねん しゆじよう  
穀尊、しかる後、正像二千年の衆生のために宝塔より

い ほうとう  
出でて虚空に住立し、右の手をもつて文殊・觀音・梵帝・

こくう じゅうりゅう  
みぎ みて  
もんじゅ かんのん ぼんたい  
穀尊、しかる後、正像二千年の衆生のために宝塔より

ひやくせん まさ うみ そそ  
うんぬん ゆえ  
とし。天台云わく「なお百川の応須に海に潮ぐべきがご」と

にちがつ してんとう いただき な  
日月・四天等の頂を摩でて、かくのゞとく三反して、  
ほけきょう よう ほか こうりやくにもん  
法華経の要よりの外の広略二門ならびに前後の一代の  
いつきいきょう だいじ ふぞく しょうぞうにせんねん き  
一切経を、これらの大士に付嘱す。正像二千年の機のた  
めなり。その後、涅槃経の会に至つて、重ねて法華経なら  
ぜんしみ しょきょう と かさ ほけきょう  
びに前四味の諸経を説いて、文殊等の諸大菩薩に授与した  
くんじゅういぞく  
もう。これらは据拾遺囑なり。

めつご ぐきょう  
ここをもつて、滅後の弘経においても、仏の所嘱に随つ  
ぐほう かぎ あ ほとけ しょぞく したが  
て弘法の限り有り。しかばば則ち、迦葉・阿難等は、一向  
しようじょうきょう ぐつう すなわ かしよう あなんとう いつこう  
に小乗経を弘通して大乗経を申べず。龍樹・無著等は  
りゅうじゅ むじやくとう

ごんだいじょうきょう

の

いちじょうきょう

ぐつう

の

権大乗經を申べて 一乘經を弘通せず。たといこれを申

べしかども、わざかにもつてこれを指し示し、あるいは

しゃくもん いちぶん

の

まつた

けどう

しじゅう

だん

述門の一分のみこれを宣べて、全く化導の始終を談ぜず。

なんがく

てんだいとう

かんのん

やくおうとう

けしん

しようだい

ごんじつ

南岳・天台等は、觀音・藥王等の化身として、小大・權実・

しゃくもんにもん

けどう

しじゅう

してい

おんごんとう

述本二門、化導の始終、師弟の遠近等ことごとくこれを宣

うえ いこんとう さんせつ た

いちだいじょうか よし

はん

べ、その上に已今当の三説を立てて一代超過の由を判ぜる

てんじく

しょろん

すぐ

しんたん

しゅしゃく

す

こと、天竺の諸論にも勝れ、真丹の衆釈にも過ぎたり。

くやく

しんやく

さんぞう

およ

けんみつにどう

旧訳・新訳の三藏も、あたかもこの師には及ばず。顯密二道

がんそ

てきたい

の元祖も、あえて敵対にあらず。しかりといえども、広略

こうりやく

もと

かんよう

た

じしん

ぞん

をもつて本となして、いまだ肝要に能えず。自身これを存ず  
といえども、あえて他伝に及ばず。これひとえに付囑を重ん  
ぜしが故なり。

ゆえ

伝教大師は、仏の滅後一千八百年、像法の末に相当た  
つて、日本国に生まれて小乗・大乗・一乗の諸戒一々に  
これを分別し、梵網・瓔珞の別受戒をもつて小乗の  
二百五十戒を破失し、また法華・普賢の円頓の大王の戒を  
もつて諸大乘經の臣民の戒を責め下す。この大戒は、  
靈山八年を除いて一閻浮提の内にいまだ有らざるところ

りょうぜんはちねん

のぞ

いちえんぶだい

うち

あ

だいかいじょう

えいざん

こんりゅう

はつしゅうとも

の大戒場を、叡山に建立す。しかるあいだ、八宗共に  
偏執を倒し、一国を挙げて弟子となる。觀勒の流れの  
三論・成実、道昭の渡せる法相・俱舍、良弁の伝うると  
ころの華嚴宗、鑑真和尚の渡すところの律宗、弘法大師の  
門弟等、誰か円頓の大戒を持たざらん。この義に違背する  
は逆路の人なり。この戒を信仰するは伝教大師の門徒なり。  
「日本一州、円機純一なり。朝野・遠近、同じく一乗に  
帰す」とはこの謂いか。

この外は、漢土の三論宗の吉藏大師ならびに一百人、  
ほか  
かんど  
きちぞうだいし  
いっぴやくにん

ほつそうしゅう　じ　おんだいし　けごんしゅう　ほうぞう　ちようかん　しんごんしゅう  
法相宗の慈恩大師、華嚴宗の法藏・澄觀、真言宗の  
ぜんむい　こんごうち　ふくう　けいか　にほん　こうぼう　じかくとう　さんぞう  
善無畏・金剛智・不空・惠果、日本の弘法・慈覺等の三藏の  
しょし　しえ　だいじ　あんし　ぐにん　きょう  
諸師は、四依の大士にあらざる暗師なり、愚人なり。経に  
だいしょう　ごんじつ　むね　わきま　けんみつりようどう　おもむき  
おいては、大小・權実の旨を弁えず、顯密両道の趣を  
しょし　ろん　つうしん　べっしん　ただ　しん　ふしん  
知らず。論においては、通申と別申とを糾さず、申と不申と  
を曉らめず。しかりといえども、彼の宗々の末学等、こ  
の諸師を崇敬して、これを聖人と号し、これを国師と尊  
ぶ。今まず一を挙げんに万を察せよ。  
いま　いち　あ  
しょうにん　ぎこう  
こうぼうだいし　じゅうじゅうしんろん　ひぞうほうやく　にきょううろんとう  
弘法大師の十住心論・秘藏宝鑰・二教論等に云わく「か

くのどき乗々は、自乗に名を得れども、後に望めば戯論と作る」。また云わく「無明の辺域」。また云わく「震旦の人師等、争つて醍醐を盗んで各自宗に名づく」等云々。釈の心は、法華の大法を華厳と大日經とに對して、戯論の法と蔑り、無明の辺域と下し、あまつさえ、震旦一国の諸師をぬすびと盜人と罵る。これらの謗法・謗人は、慈恩・得一の三乗真実・一乗方便の狂言にも超過し、善導・法然の千中無一・捨閑閣拋の過言にも雲泥せるなり。六波羅蜜經をば、唐の末に不空三藏、月氏よりこれを渡す。後漢より唐の

はじ

いた

きょうあ

なんきんほくしち

せきとく

始めに至るまで、いまだこの経有らず。南三北七の碩徳、  
いまだこの経を見ず。三論・天台・法相・華厳の人師、誰人  
か彼の経の醍醐を盜まんや。また彼の経の中に、法華経は  
醍醐にあらずの文、これ有りや不や。しかるに、日本の東寺  
の門人等、堅くこれを信じて種々に僻見を起こし、非より  
非を増し、暗きより暗きに入る。不便の次第なり。

彼の門家の伝法院の本願たる正覚の舍利講の式に云わ  
く「尊高なるものは不二摩訶衍の仏なり。驢牛の三身は車  
を扶くること能わず。秘奥なるものは両部曼陀羅の教えな  
たす  
あた  
ひおう  
りょうぶまんだら  
おし

り。顕乗の四人も履はきものを取ること能わず」云々。三論・  
天台・法相・華嚴等の元祖等を真言の師に相対するに「牛飼  
いにも及ばず、力者にも足らず」と書ける筆なり。乞い願わ  
くは、彼の門徒等、心在らんの人はこれを案ぜよ。大悪口  
にあらずや、大謗法にあらずや。詮せんずるところ、これら  
狂言きょうげんは、弘法大師の「後に望めば戯論けりんと作る」の悪口より  
起くるか。教主釈尊・多宝・十方の諸仏は、法華経ほけきょうをも  
つて已今当の諸説に相対して、「皆これ眞実なり」と定め、  
しかる後、世尊は靈山に隠居し、多宝・諸仏は各本土に

かえ  
さんぶつ のぞ ほか たれ はしつ  
還りたまいぬ。三仏を除くの外、誰かこれを破失せん。

なかんづく、弘法の覧るところの真言経の中に、三説を

悔い還すの文これ有りや不や。弘法既にこれを出ださず。

末学の智、いかんせん。しかるに、弘法大師一人のみ、法華経

を華厳・大日の一經に相対して戯論・盜人となす。詮ずる

ところ、釈尊・多宝・十方の諸仏をもつて盜人と称する

が。末学等、眼を閉じてこれを案ぜよ。

と い むかし このかた  
問うて曰わく、昔より已来、いまだかつてかくのごとき

ごうごん き  
謗言を聞かず。何ぞ上古清代の貴僧に違背し、いづくんぞ

とうこんじょくせ ぐりよ きごう

当 今 濁 世 の 愚 侶 を 帰 仰 せん ゃ。

答 え て 曰 わく、 汝 が 言 う と こ ろ の ご とくんば、 愚 人 は 定

め て 理 運 な り と 思 わん か。 し か れ ど も、 こ れ ら は 皆、 人 の

偽 言 に 因 つ て 如 来 の 金 言 を 知 ら ざ る な り。 大 觀 世 尊、 涅槃 経

に 滅 後 を 警 め て 言 わく 「 善 男 子 よ。 我 が 所 説 に お い て、

も し 疑 い を 生 ぜ ば、 な お 応 に 受 く べ から ず 」 云々。 し か

れ ば、 仏、 な お 我 が 所 説 な り と い え ど も、 不 審 有 ら ば こ れ

を 叙 用 せ ざ れ と な り。 今、 予 を 諸 師 に 比 べ て 謗 難 を 加 う。

し か り と い え ど も、 あ え て 私 曲 を 構 え ず。 専 ら 爨 尊 の 遺 誠

に順つて諸人の謬釈を糾すなり。

したが

夫れ、齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間、

そ

りょう まつ いた  
にひやくよねん あいだ  
せい はじ  
なんぼく せきとく こうたく ちたんとう にひやくよにん ねはんぎょう  
南北の碩德、光宅・智誕等の二百余人、涅槃經の「我らこ

わ

とごとく邪見の人と名づくの文を引いて、法華經をもつ

じやけん

きょう

さだ

いつこく

そうに

おうしんとう

めいわく

もん ひ  
ほけきょう

て「邪見の經」と定め、一国の僧尼ならびに王臣等を迷惑

じやけん

きょう

さだ

いつこく

そうに

おうしんとう

めいわく

せしむ。陳・隋の比、智者大師これを糾明せし時、始めて

じやけん

きょう

さだ

いつこく

そうに

おうしんとう

めいわく

南北の僻見を破し了わんぬ。唐の始め、太宗の御宇に、基

じやけん

きょう

さだ

いつこく

そうに

おうしんとう

めいわく

法師、勝鬘經の「もし如來、彼の欲するところに随つて

じやけん

きょう

さだ

いつこく

そうに

おうしんとう

めいわく

方便もて説かば、即ちこれ大乗にして、二乗有ることな

じやけん

きょう

さだ

いつこく

そうに

おうしんとう

めいわく

し」の文を引いて、一乗方便・三乗真実の義を立つ。この邪義、震旦に流布するのみにあらず、日本の得一、称徳天皇の御時、盛んに非義を談ず。ここに伝教大師、ことごとく彼の邪見を破し了わんぬ。

後鳥羽院の御代に、源空法然、觀無量寿經の「大乗を読誦す」の一句をもつて法華經を摂め入れ、還つて称名念佛に対して「雜行・方便なり。捨閉閣抛せよ」等云々。しかりといえども、五十余年の間、南都・北京・五畿七道の諸寺諸山の衆僧等、この惡義を破ること能わざりき。予が

なんばふんみょう

いつこく

しょにん

か

せんちやくしゅう

難破分明たるのあいだ、一国の諸人たちまち彼の選択集

す お ねあらわ えだか みなもとかわ なが つ

を捨て了わんぬ。「根露るれば枝枯れ、源乾けば流れ竭く」

とは、けだし、この謂いなるか。

しかのみならず、唐の半ば、玄宗皇帝の御代に、善無畏・  
不空等、大日経の住心品の「如実一道心」の一匁におい  
て法華経を摂め入れ、反つて權経と下す。日本の弘法大師

は、六波羅蜜経の五蔵の中に第四の熟蘇味の般若波羅蜜蔵  
において法華経・涅槃経等を摂め入れ、第五の陀羅尼蔵に  
相対して、「争つて醍醐を盜む」等云々。これらの禍咎は、

あいたい あらそ だいご ぬす とううんぬん かぐ

にほんいつしゅう うち しひやくよねん いま  
日本一州の内、四百余年、今にいまだこれを糾明せし人あ  
らす。予が所存の難勢、あまねく一国に満ち、必ず彼の邪  
義破られんか。これらは、しばらくこれを止む。  
迦葉・阿難等、竜樹・天親等、天台・伝教等の諸大聖人、  
知つてしかもいまだ弘宣せざるところの肝要の秘法は、  
法華經の文赫々たり。論釈等に載せざること明々たり。  
生知は自ら知るべし。賢人は明師に值遇してこれを信ぜよ。  
罪根深重の輩は邪推をもつて人を輕しめ、これを信ぜず。  
しばらく耳に停めよ。本意に付いてこれを喻さん。

だいじつきょう　ごじゅういち　だいかくせそん　がつぞうばさつ　かた　のたま  
大集經の五十一に、大覺世尊、月藏菩薩に語つて云わ  
く「我が滅後において、五百年の中は解脱堅固、次の五百年  
は禪定堅固、（已上、一千年）。次の五百年は讀誦多聞堅固、  
次の五百年は多造塔寺堅固、（已上、一千年）。次の五百年は  
我が法の中において鬪諍言訟して白法隱没せん」等云々。  
今、末法に入つて一二百一十余年、「我が法の中において  
鬪諍言訟して白法隱没せん」の時に相当たれり。法華經  
の第七の藥王品に、教主釈尊、多寶仏とともに宿王華菩薩  
に語つて云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に

こうせんるふ こうせんるふ  
廣宣流布して、断絶して惡魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼  
とう とう  
等にその便りを得しむることなれ。大集經の文をもつ  
てこれを案するに、前の四箇度の五百年は、仏の記文のご  
とく既に符合せしめ了わんぬ。第五の五百歳の一  
唐捐ならん。したがつて、当世の為体、大日本國と大蒙古國  
と鬪諍合戦す。第五の五百に相当たれるか。彼の大集經の  
文をもつてこの法華經の文を惟うに、「後の五百歳の中、  
閻浮提に廣宣流布して」の鳳詔、あに扶桑國にあらずや。  
えんぶだい こうせんるふ  
みろくぼさつ ゆがろん  
なか  
こうせんるふ  
とうほう しようこくあ

ただ大乗の種姓のみ有り」云々。慈氏菩薩、仏の滅後  
九百年に相当たつて、無著菩薩の請いに赴いて中印度に  
來下して瑜伽論を演説す。これ、あるいは權機に隨い、あ  
るいは付囑に順い、あるいは時によつて權經を弘通す。  
しかりといえども、法華經の涌出品の時、地涌の菩薩を見て  
近成を疑うのあいだ、仏、請いに赴いて寿量品を演説  
し、分別功德品に至つて地涌の菩薩を勸奨して云わく「悪  
世末法の時、能くこの経を持たば」。弥勒菩薩、自身の付囑  
にあらざればこれを弘めずといえども、親り靈山会上に

おいて「悪世末法の時」の金言を聴聞せし故に、瑜伽論を  
説くの時、末法に日本国において、地涌の菩薩、法華経の  
肝心を流布せしむべきの由、兼ねてこれを示すなり。

肇公の翻経の記に云わく「大師・須利耶蘇摩、左の手  
に法華経を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて授与し  
て云わく『仏日西に入つて、遺耀将に東に及ばんとす。こ  
の經典、東北に有縁なり。汝、慎んで伝弘せよ』と」云々。  
予この記の文を拝見して、両眼滻のごとく、一身あまねく  
悦べり。「この經典、東北に有縁なり」と云々。西天の月支

こく ひつじさる かた とうほう にほんこく うしとら かた

てんじく

国は未申の方、東方の日本國は丑寅の方なり。天竺におい

とうほく うえん

にほんこく

じゅんしき

て「東北に有縁なり」とは、あに日本國にあらずや。遵式

ふで い はじ にし つた

つき しょう

の筆に云わく「始め西より伝う。なお月の生ずるがごとし。

いま

ひがし

かえ

今また東より返る。なお日の昇るがごとし」云々。正像

にせん

にし

ひがし

なが

ひ ぼげつ

せいくう

はじ

二千には西より東に流る。暮月の西空より始まるがごとし。

まつぽうじひやく

ひがし

にし

い

あさひ

とうてん

い

に

末法五百には東より西に入る。朝日の東天より出するに似

たり。

こんぽんだいし しる い

よ かた

すなわ

ぞう お

まつ

まつ

根本大師、記して云わく「代を語れば則ち像の終わり末

はじ ち たず とう ひがし かつ にし ひと たず すなわ

ち

ひがし

にし

ひと

たず

すなわ

の初め、地を尋ねれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち

五濁の生・鬪諍の時なり。 経に云わく『なお怨嫉多し。

いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るが故なり

云々。また云わく「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ

近きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何

をもつてか知ることを得る。安樂行品の『末世の法滅せん

時』なり』云々。この釈は語美しく心隠れたり。読ま  
ん人、これを解し難きか。

伝教大師の語は我が時に似て、心は末法を示したもう  
なり。大師出現の時は、仏の滅後一千八百余年なり。

だいじつきょう もん

かんが

だいしそんしょう とき

大集經の文をもつてこれを勘うるに、大師存生の時は、  
第四の多造塔寺堅固の時に相当たる。全く第五の鬪諍  
堅固の時にあらず。しかるに、余処の釈に「末法はなはだ  
近きに有り」の言有り。定めて知んぬ、鬪諍堅固の筆は我  
が時を指すにあらざるなり。

予つらつら事の情を案するに、大師、藥王菩薩として  
靈山会上に侍して、仏、上行菩薩出現の時を兼ねてこ  
れを記したもう故に、ほぼこれを喻すか。しかるに、予、地涌  
の一分にあらざれども、兼ねてこのことを知る故に、地涌の

いちぶん

か

し

ゆえ

ゆえ  
じゅ

だいじ　さき　だ　ご　じ　しめ　れい　せい　おう　ぼ　せん　そそう  
大士に前立つてほぼ五字を示す。例せば、西王母の先相には青鳥、客人の来るには鴟鴞のごとし。

だいほう　ぐつう　ほう　かなら　いちだい　しょうぎょう  
この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を  
あんち　はっしゅう　しょうしょ　しゅうがく  
安置し八宗の章疏を習学すべし。しからば則ち、予所持  
しゆうぎょう　たた　あ  
の聖教、多々これ有り。しかりといえども、両度の御勘氣、  
じゆど　だいなん　とき  
衆度の大難の時、あるいは一卷二卷散失し、あるいは一字二  
じだつらく　ぎよろ　みようご  
字脱落し、あるいは魚魯の謬誤、あるいは一部二部損朽す。  
もくし　いちご　す　のち　いちぶ　にぶ　そんきゆう  
もし黙止して一期を過ぐるの後には、弟子等定めて謬乱  
しゅつたい　もとい　みようらん  
出来の基なり。ここをもつて、愚身、老耄已前にこれを

きゅうじょう

ほつ

ふうぶん

きへん

糾調せんと欲す。しかるに、風聞のことくんば、貴辺な

おおたきんごどの

えっちゅう

ごしょりょう

うち

きんぺん

てらでら

らびに大田金吾殿、越中の御所領の内ならびに近辺の寺々

あまた

しょうぎょう

とううんぬん

りょうにんとも

だいだんな

しょがん

に数多の聖教あり等云々。兩人共に大檀那たり。所願を

ねはんぎょう

い

うち

でしあ

じんじん

成ぜしめたまえ。涅槃經に云わく「内には弟子有つて甚深

ぎさとそと

しようじょう

だんおつあ

ぶつぼうくじゅう

うんぬん

の義を解り、外には清淨の檀越有つて仏法久住せん」云々。

てんだいだいしもうきとう

あいかた

でんぎょうだいし

くにみち

ひろよとう

天台大師は毛喜等を相語らい、伝教大師は国道・広世等を  
恃怙す云々。

にんのうきょう

い

せんり

うち

しちなん

お

仁王經に云わく「千里の内に七難をして起こらざらしむ」

うんぬん

ほけきょう

い

ひやくゆじゅん

もうもろ

すいげんな

云々。法華經に云わく「百由旬に諸の衰患無からしむ」

云々。國主、正法を弘通すれば、必ずこの徳を備う。臣民等、この法を守護せんに、あに家内の大難を払わざらんや。

また法華經の第八に云わく「願うところは虚しからじ。また現世において、その福報を得ん」。また云わく「當に今世において現の果報を得べし」云々。また云わく「この人は現世に白癩の病を得ん」。また云わく「頭破れて七分に作る」。また第二の卷に云わく「經を読誦し書持することある者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」云々。第五の卷に云わく「も

し人、惡み罵らば、口は則ち閉塞せん」云々。  
うんぬん。

伝教大師云わく「讚むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く」等云々。ものつみ

を無間に開く」等云々。ものつみ

伝教大師云わく「讚むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く」等云々。ものつみ

は阿鼻の別名なり。國主、持者を誹謗せば位を失い、臣民、

行者を毀呰せば身を喪ぼす。一国を挙げて用いざれば、定

めて自反・他逼出来せしむべきなり。また上品の行者は

大の七難、中品の行者は二十九難の内、下品の行者は

無量の難の隨一なり。また大の七難において七人有り。第一

は日月の難なり。第一の内にまた五つの大難有り。いわゆ

にちがつど

うしな

じせつほんぎやく

しゃくにちい

る「日月度を失い、時節反逆し、あるいは赤日出で、あ

こくにちい

にさんし ごひい

ひしょく

るいは黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕し

ひかりな

にちりんいちじゅう

にさんし ごじゅう

りんげん

て光無く、あるいは日輪一重、二・三・四・五重の輪現す」。

また経に云わく「二つの月並び出でん」と。今この国土に

あ

ふた

ひ ふた

つきとう

だいなん

よ なん

こくど

有らざるは、二つの日、二つの月等の大難なり。余の難は

あ

あ

ふた

ひきょう

にほんこく う

み

大体これ有り。今この亀鏡をもつて日本国を浮かべ見るに、

かなら

ほけきょう

だいぎょうじやあ

すで

そし もの

だいばちあ

必ず法華経の大行者有るか。既にこれを謗る者に大罰有り。

これを信ずる者、何ぞ大福無からん。

いま

りょうにん

びりょく

はげ

よ

がん

ちから

そ

ほとけ

きんげん

今、兩人、微力を励まし、予が願に力を副え、仏の金言

こころ

きょうもん

ぎょう

しるしな

を試みよ。経文のごとくこれを行ぜんに徵無くんば、  
釈尊正直の経文、多宝証明の誠言、十方分身の諸仏の  
舌相、有言無実とならんか。提婆の大妄語に過ぎ、瞿伽利の  
大狂言に超えたらん。日月地に落ち、大地反覆し、天を仰  
いで声を発し、地に臥して胸を押さう。殷の湯王の玉体を  
薪に積み、戒日大王の龍顔を火に入れしも、今この時に当  
たるか。

もし、この書を見聞して宿習有らば、その心を發得す  
べし。使者にこの書を持たしめ、早々に北国に差し遣わし、

きんごどの

へんぽう

と

はやはやぜひ

き

金吾殿の返報を取つて、速々是非を聞かしめよ。この願も

じょう

こんろんざん

たまあざ

もと

くら

おさ

がん

し成せば、崑崙山の玉鮮やかなるは求めずして藏に收まり、  
大海の宝珠は招かざるに 掌に在らん。恐惶謹言。

たいかい

ほうしゅ

まぬ

たなびこう

あ

きょうこうきんげん

下春十日

そやにゅうどうどの

日蓮 花押

げしゅんとおか

にちれん

かおう

曾谷入道殿  
おおたきんごどの

大田金吾殿